

「が」の使用について

大森 海太

ペンクラブで何でも書こう会に入れていただいた初めのころ、私の文章はセンテンスが長くて「が」の使用が多く、某氏から「八〇〇字の中に六回もある」などご指摘をいただいたものである。

その後こちらを入れかえて、なるべく「が」の使用を抑えるようにはしたが（ア、またやっちゃった）、でもそんなに忌むべきものなのだろうか？

「が」には「AではあるがBではない」という否定を伴う用法と、もっと軽い使い方、例えば「日曜日銀座に行ったが、大変な人出だった」がある。ペンクラブでは前者は許されるが（これはOK）、後者はダメというのがルールだそうだ。

しかし私は学術論文や報告書を書いているのではないし、気分としてはできるだけ日常の話し言葉に近いリズムや感覚で表現してみたいと思っている。前述の「銀座に行ったが・・・」にしても、普段の会話で普通に使われる言い方じゃないですか。

そればかりか大文豪の作品にだってよく使われている。例えば谷崎潤一郎の『陰翳禮賛』の一節、日本の廁についての記述。

「植え込みの蔭に設けてあり、廊下を傳はって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうづくまって（中略）庭のけしきを眺める気持ちは、何とも云へない」

『陰翳』にはこのほかに「が」が頻繁に使われていて、「が」撲滅運動の方が読まれたら目を廻すのじゃないかと心配になるくらいだ。

漱石の『吾輩は猫である』には、「ある小春の穏やかな日の二時頃であったが、吾輩は（中略）運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした」

ほかに開高健や吉田健一の作品などを挙げればキリがないが、紙数の関係で省略。

聞くところによると、以前ペンクラブには新聞記者OBの先輩がおられて、「が」撲滅や長いセンテンス回避について厳しく指導されたとか。でもね、私たちはなにも新聞記事を書いているわけじゃないだし、何でも書こう会というくらいだから、そんなに目くじらを立てなくてもいいんじゃないでしょうかね。